

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）  
 大学院生研究  
 2003年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院			文学 研究科	史学 専攻
指導教員	所属・職名		氏 名		
	文学部 教授		蔵持 重裕 印		
自然・人文の別	自然 ・ ○ 人文	個人・共同の別	○ 個人 ・ 共同 名		
研究課題	戦国期奥羽社会からみた統一政権の成立過程に関する研究				
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏 名		
	文学研究科史学専攻 博士課程後期課程4年		遠藤 ゆり子 印		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏 名		
	文学研究科史学専攻 博士課程後期課程4年		遠藤ゆり子		
研究期間	1年間	2003年度			
研究経費	200 千円				

**研究の概要** (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

奥羽地方を主たる研究素材に設定し、権力の問題を民衆の生存・生活、社会のあり方から、その歴史的性格を見出そうとする観点で研究を進めた。その際は、近年の移行期村落論を踏まえ、戦国時代の権力である戦国大名・国衆が、村落に対峙した権力だという意味で、近世と同質の権力だとの理解に立った。このような認識のもと、当該期民衆の発現形態である村落の存続・維持の問題から中近世移行期社会を考察した。特に、従来の研究で、戦国～近世社会を断絶する権力と位置付けられてきた、豊臣政権という統一権力の成立過程に注目し、奥羽地方の視点からその成立過程の実態追究を試みた。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ 戦国時代 ] [ 奥羽地方 ] [ 権力 ]

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)

本年度は、主に以下に掲げる 2 点に関する成果を得た。

## 1. 「太閤検地反対一揆」論の再検討

中世と近世を分かち社会変革「太閤検地」に反対し、豊臣政権の統一過程では、奥羽をはじめとする「辺境」地域で一揆が起こった。このような議論を再考し、改易という領主の変更に伴う問題として、「太閤検地反対一揆」論を捉え直そうと試みた。具体的には、天正十九年(1591)七月の南会津郡赤岡村を取り上げた。天正十八年(1590)の「田島郷御検地帳」を分析し、その上で『無枕雑補家宝記』にみえる「焼畑」を検地帳に載せるか否かの問題に発する「一揆」を検討した。現地へ赴き、村の景観や田畑のあり方について確認し、明治初期の地籍図および土地台帳を調べた。だが、土地台帳調査を終えることはできなかつたため、論文としてまとめるには至らず、今後課題を残した。

## 2. 婚姻関係の機能論(有縁・無縁の機能論にむけて)

## \* 岩手県東磐井郡地方における土豪層にみる婚姻関係の復元

慢性的飢饉状況下に戦争の恒常化した戦国時代。そこに生きる人々の生命維持装置として、イエ(親族結合)と村があり、緊張時に両者が弱点を補う機能を持つところに村は成立した。かつて蔵持重裕氏が指摘したこの点を踏まえ(同『日本中世村落社会史の研究』校倉書房、1996年)、岩手県東磐井郡(戦国期は葛西氏領国)を事例として、①村落を越えた婚姻関係の実態追究、②村落にとっての婚姻関係の意義を検討した。

まず①については、同郡の土豪、千厩村千厩城主金野家(元千厩町)と、同家から分かれたという天狗田村室石館主金家(現大東町)を取り上げた。両家に伝来する系譜から、戦国～近世初期の婚姻・養子縁組動向を地図上に復元することを試みた。そして、千厩町金野家の特徴として、村内の縁組みが一件、村外が十一件であり、かつ村外の場合は、比較的遠方の大きな村町の土豪層であること。知行争いを伝える薄衣氏との縁組みも伝えることを指揮した。一方、大東町金家は、近隣村との縁組みが多いという特徴を見出した。以上から、婚姻のあり方には、家による違い、傾向のあることが明らかとなった。このことは、おそらく、村落における両家の機能の相違、または村落を越えた地域社会における両家の役割の違いに起因すると予測される。だが、史料制約により、両家を事例とした具体的追究(②の問題追究)はできなかつた。

そこで、②の問題に関しては別のイエを素材に検討を加えた。一つは、永禄元年(1558)の及川頼家(鳥海村柏木館主=現大東町)と葛西氏一門千葉信近の争いを事例とした。ここでは、戦時において、村内有力者の親類関係が、他村からの合力獲得に機能したことを指摘した。尚、近江国姉川流域では、村落同士の用益相論に起因する土豪層間の用水相論で、土豪層の所縁に基づく合力獲得がなされたことが知られる。つまり、土豪層の婚姻関係が、村落間相論における合力獲得、平和維持機能を果たしたと考えられる。二つ目は、文化四年(1807)の苗代育成不良時に、大原村(現大東町)村民が、上奥玉村(現千厩町)の親類方に苗を融通された事例から検討した。だが、これが家の生業維持のために村落結合を揺るがせた事例か、もしくは苗が村落に還元され、村落の生業維持に機能したかは判然とせず、後者の可能性を指摘するにとどまった。

本研究は、2003年度立教大学史学会大会にて報告する機会を得た。

## 研究成果の概要 つづき

## \* 元禄期における群馬県三波川村の婚姻関係の復元

イエと村は、対立しつつも、相互に補完することで成り立っていたこと。それによって生命を維持し得た時代、またできるようになった段階として、当該期社会の歴史性は問われるべきこと、この点を研究の視座に据えた。そして、そこから①村におけるイエの広がりの実態追究、②イエと村の関係、を考察した。事例としては、近世初期の三波川村（現群馬県鬼石町）を取り上げ、戦国期に遡るイエと村の関係究明に向けた議論の提示を試みた。尚、三波川村は、幾つかの小村（時代によって異なる）から成る散村である。

具体的には、近世に名主化した飯塚家に伝来する元禄五年(1692)の宗門帳に注目し、この分析からイエと村の関係を検討した。同帳は、17の小村ごとに、役屋（家役の責務を負う家）の檀那寺と構成、その下男・下女の檀那寺と構成、家抱・門前（役屋に従属することで成り立つ家）の檀那寺と構成、最後に全村の集計を記す、という体裁をとる。そして、母・妻・嫁の出身村（と家）、兄弟・男子の養子先の村（と家）、家族の奉公・質物先の村（と家）が記載され、近世初期段階における村のイエのあり方を知ることができる希有な史料である。その動向を地図上に落とし、意義を検討した結果、以下のような成果を得た。

まず、イエの広がり方だが、村内の家（役屋、家抱・門前）による大差はみられなかった。だが、名主家は他村の名主家と縁組みを結ぶなど、特色ある家もあった。また、基本的には近隣村との縁組みが多いこと。小村ごとに縁組み相手が村内・他村に集中するなどの特徴がみられ、小村の性格が反省されていると思われることを指摘した。さらに、ここで縁組み関係の検出できた近隣村とは、出入作、秣や薪の入会、商売や商業上の関わりを究明できた。生業における競合・協同関係がイエの展開状況と重なるのである。おそらく、生業上の競合・協同関係に基づく日常的交流に、同村のイエのあり方は規定されたものと思われる。この点を踏まえるならば、村による生業・生存のための対立・合力・融通関係は、イエを抜きには考えられない。そのことは、以下のことから明らかとなった。すなわち、村民の奉公先・質物先・移住先が、村内のイエの広がりと同重なること。問題ある人物（牢人）を村に引き入れる際、その親類が村に対して保障すること。イエの問題に発する村落間紛争を、イエを形成する村の名主同士が解決することなど、イエは村の生命維持にも機能したのである。だが、それは同時にイエの問題が村の問題へ転化し得ることを意味した。それをイエが回避・保障する限り、村の承認を得て機能できたのである。

今後の課題としては、戦争が恒常的か否かという社会状況、村における土豪・名主の機能論、それを踏まえた戦国と近世の段階差の究明。家の寺庵等、無縁の機能との比較を揚げた。

## \* 慶長五年（1600）にみる保春院の機能

前稿（「戦国期奥羽における保春院のはたらき—戦国時代の平和維持と女性—」『日本史研究』486号、2003年）を踏まえ、慶長五年に最上氏（山形城主＝現山形県山形市）への伊達氏（岩出山城主＝現宮城県岩出山町）の合力獲得において、保春院という女性が如何なる役割を果たしたかを考察した。この保春院という女性は、最上氏当主義光の妹であり、伊達氏当主政宗の実母にあたる人物である。このような大名家から大名家へ縁付いた女性が、親戚としての有縁性と、女性として、また保春院の場合は尼としての無縁性を活かし、それぞれの大名国家にとって如何なる機能を果たしたかを明らかにすることを試みた。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版者、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

### ①雑誌論文

#### \* 書評

- ・ 著者名：遠藤ゆり子
- ・ 書評：藤井譲治著『幕藩領主の権力構造』(岩波書店、2002年)
- ・ 雑誌名：『史苑』171号、2003年、132～134頁

#### \* 書評

- ・ 著者名：遠藤ゆり子
- ・ 書評：荒川義夫著『戦国期東国の権力構造』(岩田書院、2002年)
- ・ 雑誌名：『歴史評論』646号、2004年、96～100頁

### ②図書

#### \* 図書

- ・ 編者名：藤木久志・蔵持重裕
- ・ 著者名：遠藤ゆり子
- ・ 論文名：「慶長五年の最上氏にみる大名の合力と村町  
－大名家の有縁性と無縁性－」
- ・ 出版者：校倉書房
- ・ 書名：『続 莊園と村を歩く』(未定)
- ・ 発行年：2004年(予定)

#### \* 図書

- ・ 編者名：西村汎子
- ・ 著者名：遠藤ゆり子
- ・ 論文名：「中近世移行期における平和維持と女性」
- ・ 出版者：吉川弘文館
- ・ 書名：『戦争と女性』第一巻
- ・ 発行年：2004年(予定)

### ④その他

#### \* 学会発表

- ・ 会名：2003年度立教大学史学会大会報告
- ・ 報告者名：遠藤ゆり子
- ・ 題目：「婚姻関係からみた戦国時代の村落－奥州東磐井郡を事例として－」
- ・ 開催日：2003年6月14日(土)
- ・ 開催場所：立教大学五号館会議室